

長女

(上)

美 知 代

『まあ君聞き給へ』と、某と云ふ男が語り出した。
 御承知の通り、僕が妻を迎へて家庭を造つたのは漸と一昨
 年の五月、妻は今懐妊しては居るものゝ、まだ一度の産をし
 た事もないのに、突然僕に娘があつて、而も今年十一歳にな
 ると聞いては、其驚愕も無理からぬ事だ、御當人の僕でさへ
 最初それと紹介の手紙に接した時、ひたと驚ろいて、餘りの
 事に夢ではないかと疑つても見たが、送つて来た寫眞は確に
 僕の實の娘であることを證據立てた、御覽なさい、此額、此
 眉、此鼻、それに懐しいのは黒目勝の清しい其瞳、引きしき
 つて而もこぼれる程の愛嬌をもつた口元は、美しかつた母親
 そっくり。

其母親こそ僕の過去の妻なので、と云つたばかりではお解
 りになるまいが、仔細あつてまだ入籍の手續きに至らなかつ
 たけれど、よしある人の娘で、以前の姓名は佐伯艶子と云つ
 た。

當時都下五大新聞の一つである〇〇新報の記者であつた僕
 は、日清戦争に従軍して凱旋つて來ると、まだ戦珍らしい都
 民は狂者の様に歓迎して觀戰談をとの申込は此處からも其處
 からも、で〇〇新報記者某君演説と記した紙幟は至る處の集
 會に翻り、文壇の片遇に漸く籍を置いた青年文士の身として、
 夢更ら思ひ設けぬ名聲は忽ち擧つたが、満場破れる様な拍手
 喝采に迎へられて演説に立つ度毎、僕は我と我名聲のすばら

しさに驚くと共に、云ひ知らぬ得意の笑を禁じ得なかつた。
 或時麴町の某女學校から再三招待されて、終に斷り兼ね其講
 堂に演説する事となつたが、何しろ其頃はまだ年若くはあり、
 美しい女學生の前に立つては流石顔も赭らみ、兼ねて口の悪
 いものに聞き及んだ式部連の後の批評と喚と思ふと、聲さへ
 云ひ甲斐無く慄へるのであつたが、漸くお茶を濁して段を下
 りると、接待係の徽章を胸につけた年頃十八九の美しいのが
 靜かに歩み寄つて、丁寧な勞ふので、お世辭とは承知して居
 りながら賛められて悪い氣持もしなかつた。て僕は此處に初
 めて佐伯艶子と知り合つたのである。難を云へば氣品の無い
 面ざしてはあつたけれど、色白の美しい眼元口元、殊に針つ
 ささした程の小さな髭は何とも云へぬ愛嬌を持つて、一體に
 華美な性格であつた。

終に二人は戀に落ちて僕は表面縁談を持ち込んだ、處が大
 切な娘を財産も無ければ地位も持たぬ一書生に呉れる事は出
 來ぬと云ふので、僕は見事恥しめられた、けれど艶子は父母
 に脊いてひそかに僕の許に走つたので、二三の同情者の盡力
 に依り、僕等は目出度某教會に華燭の典を擧げたのである。

其後程無く僕は或る事情の爲め〇〇新報社を出る事と成つ
 たので、目白村にさしやかな家を借り入れて、暫時靜に田園
 に暮す事と決心した。で艶子に話すに親しい友達が遠くなる
 のを口實に最初は非常に反對したけれど、僕が半日掛りで説
 いた結果漸く不承して呉れたが、來て見ると思つたよりも一
 層閑靜で、後の林、横手の藪と、畑の様な落日に彩られた美
 しさ、其かまた靜に薄く成つて暗く成つて段々暮れるに

つれて、見渡す限り野も山も皆一様に濃い紫色に變つて、其
 靜さは穩やかさは！僕は喜んで筆をかんだ、けれど其自然の景
 色にさまで趣味を持たぬ艶子は、都戀しさに種々不平を鳴
 らしては無暗と淋しがるのであつた、僕とても其寂寥苦痛を
 思ひやらぬのではないが、筆を執つては又苦も有つて詩成ら
 ぬ朝夕、無理と知つて困らせたもの幾度、理想の戀愛が如何
 の斯うのと云ふけれど、矢張り物質の關係は免れぬもので、
 馴るゝにつれても互の欠點も眼に付けば、面白からぬ感情に
 顔赭め合つたのも一度や二度ではない、其津度艶子は『これ
 程我儘者の意生地無しとは思はなかつてよ』と云つて泣くの
 てあつた。實際艶子は失望したのである、凱旋の當時流行兒
 程の大家で筆を執れば名文立處になるものゝ様に思ひなして
 居たらしい、けれど其實僕は大家でもなければ、一枚幾圓の
 名文も書き得ず、其上に絶へず、苦虫をかみ潰して、不如意



村の道

勝の經濟に思ひ煩ふ艶子を心に痛々しう思ひ乍ら、格別やさ
 しい言葉に慰めるでとなく、不機嫌な様子に兎角氣むづか
 しい事ばかり並べ立てるのである、思へば無理もないが、事
 の行きかゝりては、つい心にも無い荒々しい言葉も出て『そ
 んなら勝手に出て行け』と怒鳴るので。

次第に艶子は短氣に成つて一寸した事にも癪癪を立てるの
 てあつたが、椽側の柱にもたれてじつと斯う右手を懐に差入
 れて、悲し氣な眼付きに淋しく東京の空を眺めながらやる瀬
 無い憂愁に沈んで居ることもあり、又時によつては茶の間の
 長火鉢によつて啜泣をする事もあつた。或日見兼ねて『如何
 したんだ、何處が悪いのかい』と尋ねると、否と答へる。

『ぢや如何したと云ふんだ、恐ろしく顔色が悪いぢやないか』
 『うるさいのね、もう知らな』

『勝手にしろ』ふいと起つて僕は書齋に入ったが、暫らくし
 てのぞいて見ると矢張り泣いて居て、毎度も血の道の時の習
 慣の眉の間が茶色か、つた様に見へた。て僕は可哀相なやう
 な濟まない様な氣がして傍へすり寄り寄らうとしたが、ふと又書
 齋に取つて返へして、書き集めた三三の原稿を一まとめに紫
 メリンスの風呂敷に包んで、其儘玄關の下駄を突掛けて家
 を出た。

て博文館の編輯局に親友を訪れて、原稿を周旋して貰ひ、
 案外好い價に賣れたので、久し振りに艶子を喜ばせやうもの
 と、いそ／＼歸つて見ると家内は寂として、最早彼は七時に
 近く四邊は全然暮れ果て、居るにもかゝはらず灯も見へぬの
 だ。(未完)